

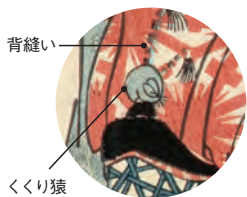
浮世絵で学ぶ
お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、
子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。
広報の吉澤明さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えてください。



江戸名所百人美女
溜いけ
三代歌川豊国
安政5年(1858)

火鉢の横で前掛けを解き、裸のわが子をふところに抱き、あやしながら、肌を通して暖める母。火鉢にかぶせた干し籠には子どもの赤い着物が干されている。よく見ると背中のかぶり下には「くくり猿」というお守りが縫い付けられ、さらに「背縫い」も見られる。「くくり猿」も「背縫い」も子どもの魔除けで、わが子の健康を祈る親の深い愛情が伝わってくる。

浮世絵に見える
子どもへの心温まる親心

この浮世絵は、母親らしき女性が、赤ちゃんを着物に包んであやしている、江戸時代の育児の様子を描いた母子絵です。

当時は衛生環境も医学水準も低かったため、病や災いを恐れ、わが子が健康に育つことを願い、親子の愛情あふれる作品が数多く描かれていました。また、母子絵のように子どもが描かれている絵は人気があり、当時の日本人の心の中で、子どもは「宝」という考えが常識となっていたことがわかります。

江戸時代は天下泰平の世となり、家の継承が第一義に考えられるようになりました。そのため母親が命がけで出産した子どもを健康に、賢く、立派な世継ぎとして育て上げる仕事は家長である父親の役割でした。しかし、当時は子育てを助けてくれる名付け親や乳付け親(※1)、拾い親(※2)などの数多くの仮親がいて、地域ぐるみで子育てを見守っていたと言います。

宮参り、七五三などの通過儀礼や五節句などの年中行事は子どもの健康や健全な成長を祈るものであり、現代に受け継がれてきました。この絵にありますように子どもの健康と成長のために、お守りや魔除けなどの力を借りてでも何とかわが子を無事に育てあげたいという親心は、今も変わらずに日本人の心に残っているのではないのでしょうか。

※1 生後2日間、お乳を飲ませてくれた女性
※2 丈夫に育つよう、形式的に捨てた赤子を一時抱いて育てる人。後日実親が譲り受ける

江戸ミニ知識

お父さんも育児書で
猛勉強？

子育ての責任を負う父親にとっての強い味方は、父親向けに数多く売られていた養育書や育児書。父親たちは子育てやしつけの仕方を学び、子どもの手本として立ち居振る舞いを正してわが子を育てていました。

浮世絵で遊んでたんだ！？

浮世絵は「美人画」や「役者絵」など有名ですが、子どもが玩具として遊んだ「おもちゃ絵」もありました。切ったり貼ったりして作る「たてばんこ」という紙工作や「着せ替え絵」も人気がありました。また、「物語絵」には桃太郎や金太郎などのヒーローが登場。「妖怪絵」も人気がありました。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note